

「森の恵み」を考える——人と自然の平和的共存に向けて」中間報告

青柳寛・戸谷浩・野口久美子・勝俣誠

猪瀬浩平（コーディネーター）

世界各地で、深刻な森林破壊が進んでいる。このような状況のなかで、本研究は、歴史学や文化人類学、政治経済学の立場から、人と森林との関係を歴史的、文化的に検討し、人と森林、人と植物の持続的で、調和的關係を生み出すための「森林の思想」を探ることを目的とする。気候変動や産業化によって森林をめぐる状況が劇的に変化するなかで、人びとの遊びを含めた暮らしや、自治がいかに成立しているのかを視野に入れ考察する。

2025 年度はこれまでに以下の活動を行った。

1、明治学院に関わる樹木の保全・生育についての調査および実践：明治学院正門前大銀杏および横浜校地 8 号館前ケヤキについて

本研究会メンバーを中心に結成された「大イチョウの風致喪失を憂慮する明治学院大学教職員有志」を中心に、地域社会における街路樹の意味を行政と市民との関係を通して考える研究を継続した。港区への要望書を提出するとともに、明治学院大学としても大銀杏の保存（必要に応じたキャンパスへの移植）を求める署名の活動を行った。また TBS ラジオ等でもこの活動の様子が報道されている。

5 月 24 日に神田警察通りの街路樹を守る会（以下、守る会）を訪問し、千代田区が再開発を名目に計画する銀杏並木の伐採に抗議し、座り込みを行う人びとのお話を伺った。歩道の拡幅のための街路樹の伐採（新たに桜を植える）千代田区の計画に対し、守る会は地域の景観を形成し、住民をはじめ周辺を行きかう人びとの「景観コモンズ」を形成していた銀杏並木保存を求めた。議論は十分になさず、反対の座り込みがある中でも伐採は進んだ。2024 年度も訪問している今回の訪問時にはすでに数本を残すだけになっており、また 6 月に 150 本全てが伐採された。

横浜校地 8 号館前のケヤキは、大きな緑陰をつくるとともに、周辺にベンチが配置され授業前後の学生たちの憩いの場になってきた。クリスマス期にはイルミネーションがなされるなど、横浜校地のシンボルの一つでもある。このケヤキについてタイワンシマリスの食害によって枯死が進むとして伐採がなされるとの通知が横浜管財課からなされた。これについて、大銀杏の伐採の際と同様、大学の景観コモンズを形成する樹木について、教職員への共有がなされないまま、伐採の計画が進行することについて問題提起を行った。前年度の研究 PJ の活動で出会った藤井英二郎氏（千葉大学名誉教授／環境植栽学）に相談し、タイワンシマリスの食害について詳しい樹木医佐々木知幸氏の紹介を受け、5 月 15 日にお話を伺った。ケヤキの状況を共有する中で、佐々木氏よりタイワンシマリスの食害で伐採にいた

った事例はこれまで聞いたことがないこと、気候変動の影響や、植栽枡が十分されていない、植樹の際に深植えがなされているなど、そもそも適切な管理がなされていない可能性が示唆された。そのうえで、舞岡公園はタイワンシマリスの巨大コロニーを形成しており、対処療法としてケヤキを伐採するだけでは根本的な解決にならないこと、むしろ気候変動が進む中で、他の樹木と共にいかに共生するのかという視野で大学キャンパスを見直す必要があること、その要は議論を経て、適切に樹木が保全され、景観コモンズが維持されていくことが、研究教育機関としての明治学院大学に持つ意味について確認した。

2、8月22日～23日／11月1日～3日岡山県での調査（猪瀬所員）：長島愛生園、邑久光明園

2024年度までに四万十町で行ってきた調査（森林保全、雁皮育成に取り組んでいるNPO法人朝霧森林倶楽部の活動の参与観察）において、長島愛生園の入所者（ハンセン病の元患者）の方の記憶の継承に取り組む方と出会った。この方より、ハンセン病の元患者の記憶を継承する素材として、雁皮の紙が使えないかという相談があり、やり取りを続けていくうちに、長島にも雁皮が自生していること、約60年前に当時の入所者が島外に販売していたという記憶が伝えられていることを確認した。これを受けて、8月に現地を訪問し、長島における雁皮の自生の状況を確認するとともに、入所者の方への聞き取り、および歴史館の見学を通じ、ハンセン病者の隔離の経験や、入所者の文化的、政治的実践についての理解を深めた。

現地踏査を通じて、もともとの地質や地形に加え（花崗岩質の土壌／風化、崩壊によって日照が生まれる状況）、長島愛生園の設立による長島の開発、設立後の入所者の開拓・開発（畑の開拓、夫婦で暮らす住宅の建設、朝鮮人入所者を中心とする道路の敷設……）の攪乱によって、雁皮が自生しているのではないかという仮説を立てることができた。なお、現地では、長島愛生園の入所者に加え、長島愛生園内にある喫茶店「さざなみハウス」のスタッフやその関係者、文化人類学や歴史学を専門にする研究者、美術作家と、長島で雁皮が生えていることの意味や、長島愛生園の記憶を雁皮の紙に残す可能性について議論した。

またこの調査の前には、3月の山火事が起きた山林において、雁皮が生育していることを確認した。これは、雁皮が山火事等の大規模攪乱後の先駆植物であることを示すものであり、自然災害だけでなく、戦争被害の後にも雁皮が森を再生させるさきがけになっている可能性を示していると考えている。

また11月には再度長島を訪問し（猪瀬は科研費での調査として訪問／勝俣が研究PJとして訪問）、雁皮の種の採取を行うとともに雁皮の活用可能性について議論を深めた。また、今回は邑久光明園にも訪問し、園内に生えている樹木の意味について検討を行った。この議論を踏まえて、文化がまちにある！プログラム備前実行委員会等が主催する「まちのすきまカフェ 2025～内なる声 遠い声～」において、大江満雄編『いのちの芽』におさめられ

た長島愛生園にかかわる作品をめぐる展示に協力し、雁皮の紙をつかったインスタレーションが行われる予定である（11月22日～24日岡山市ルネスホール／12月20日～28日長島愛生園むつみ交流館）。